

# お茶うけ 第87話

## おじいさんのオモチャ談義 その2

初孫が生まれてから、私は百貨店のオモチャ売場に足繁く通うようになり、孫の成長に合わせて、適当と思われるオモチャを探しました。私のオモチャ選びの基準は、孫が遊びの中心になって、ひとり遊びを楽しめるものです。しかし、売場に並んでいるのは、子どもがボタンを押すと自動的に決まった動作を繰り返すようなものが多く、子どもが主人公になって遊べるオモチャは少ししかありません。

子どもは成長して、手の動きがしっかりし、手先が器用になるのに従って、「ものを打ちつける遊び」「ものを入れたり出したりする遊び」「積木などを積み上げる遊び」「ものを嵌めたり外したりする遊び」と、次第に高度で複雑な動作を伴う遊びができるようになります。

孫のひろくんの遊びも同じような経過を辿りました。1歳6ヶ月の時は、「お茶うけ70.子どもとオモチャ」に書きましたように、ものを入れたり出したりする遊びが好きで、コースターとカゴ、スポンジボールと小さなバケツなどを組み合わせて遊びました。また、「ポスト・ボックス」もお気に入りでした。満2歳を過ぎると、積木を上手に積み上げて遊ぶようになりました。積み上げるコツを覚えて、かなりの高さまで倒さずに積むことができました。そして、2歳8ヶ月のひろくんは、前回の「その1」で説明しましたように、トンカチ積木でさまざまな形を作り上げました。



何故、日本の百貨店やスーパーのオモチャ売場には、積木などを除くと、子どもが遊びの主人公になって、自分で工夫しながら遊べるオモチャが少ないのでしょうか。

『かしこいおもちゃの与え方』を書いた岩城敏之さんは、ドイツなどを訪問して、ヨーロッパの絵本とオモチャの状況を調べました。そして、ヨーロッパと日本では、オモチャに対する考え方が基本的なところで大きく違っていること、そのことが店で売っているオモチャの形や機能の違いに現れていることに気がきました。

岩城敏之さんは、ヨーロッパと日本の基本的な違いは、子どもをオモチャの主(あるじ)と考えるか、僕(しもべ)と考えるかであると、おおよそ次のように説明しています。

ヨーロッパ(ドイツ・北欧)の人びとは、子どもはオモチャに自分から能動的に働きかけて遊ぶものと考えている。そこで、子どもたちが主人公になり想像力を働かせて遊びながら育つようなオモチャが好まれる。オモチャは単純で基礎的な四角い積木のようなもので、色も刺激の少ない素材そのままのものが多く、

それに対して、日本の人びとは、オモチャは子どもを喜ばせるもの、子どもは受動的にオモチャを見て喜ぶものと考えているようである。そこで、子どもの興味を引くことに主眼を置いてオモチャを作るので、自動仕掛けで面白く動かししたり、テレビのような綺麗な画面を持たせたり、外見を刺激的な色や形で飾りたてたりしたものが多い。

私は、孫たちと遊ぶとすれば、積木やトンカチ積木のような、作ってはこわし、こわしては作れるオモチャが好きです。なぜなら、形や機能が決まったものでは、孫がマニュアル以外の使い方をした時など、つい「こわしてはいけませんよ」とか、「そんなことしたら動かなくなるでしょ」と言って、遊びの邪魔をしてしまいそうだからです。また、ボタン一つで自動的に動くようなオモチャでは、おじいさんの出番がなく手持ち無沙汰です。積木などでしたら、そばで見ている、子どもの作るものが固定化した時など、一寸したヒントを与えて、子どもの考え方をさらに発展させる楽しみがあります。

また、岩城敏之さんは、ドイツの人びとが考える「良いオモチャ」とは何かについて、『かしこいおもちゃの与え方』の中で、次のように語っています。

岩城さんは、ドイツで一般に良いオモチャと人気の高いのはどれですかと、絵本の本屋、図書館、オモチャ屋の人たち、保育園の先生、主婦、通訳の人などに尋ねましたが、全ての人異口同音に「良いオモチャは、人によって違います」と答えたので面食らいました。現地で人気の高いオモチャの情報が得られなかった岩城さんは、帰りの機内で突然、「人によって違う」の言葉の意味を悟りました。それは、「ドイツの人びとは、オモチャを選ぶとき、世間の評判よりも、その子どもを優先させて考える。選ぶ人が子どもの育ち方や感じ方をよく理解した上で、その子に合うと思って与えたものが、その子にとって良いオモチャである。ドイツの人びとには、一般的な評価としての良いオモチャなど考えられないのだ」ということでした。

孫にとっての良いオモチャを探すのは、おじいさんにとっても結構楽しいものです。

以上

参考文献:

『かしこいおもちゃの与え方 - あふれるばかりのおもちゃの中で』  
岩城敏之著 法政出版刊 1994年10月 1日初版発行